

新宿物語

福田圭子

新宿の地名は、元禄時代に日本橋と高井戸宿の間のほぼ中間に開設された内藤新宿に由来しているといわれ、この地は、品川・千住・板橋とともに江戸四宿の一つとして発展したところである。新宿は、今も昔も旅の拠点であることには変わりがないが、今日のめざましい発展ぶりを、当時の人々は予想すらしていなかったことだろう。

その新宿に地下鉄が開通してから今年3月で30年になる。東京に日本で最初の地下鉄が誕生したのは、昭和2年の暮れのことであるから、地下鉄線の駅としての新宿の歴史は一見浅そうにも感じてしまうが、当時の地下鉄ネットワークは、銀座線と池袋～新宿間の丸ノ内線だけであったのだから、古いものであると言っているまい。その丸ノ内線新宿駅に昨春、勤務先の新人研修で1ヶ月半の間、旅客掛見習として配属になる機会を得た。

駅という場所は、日常ある目的地に向かうための通過点にすぎないことが多いため、利用者にとってはそこで繰り広げられるドラマのストーリーに連続性を感じないのが普通である。だから、そこで何かが起こったとしても、遭遇したという感じを持つにすぎないことが大半であろう。その駅に一日中とまではいかないにしても、比較的長い時間を過ごしていると、それまで感じることの出来なかった面白さを味わうことができたように思える。

お客様の面前に立たされている自分のことを思うとき、なんだか歴史の証人になったような気がした。自分が見ていることも、駅の一部で起きている出来事であるのに、すべてを見ているような気になってくるのである。しかし、それと同時に新宿駅自身が歴史の

証人そのもののような気もしてきて、「この駅は善いことも悪いことも、楽しいことも悲しいことも、すべてありのままに見てきているのだ。この30年間の新宿の生態を冷静に見つめてきていたのだ。」と感じられた時、一瞬のうちに歴史の証人であるというだけそれた夢想からは覚め、自分もまた単なる旅人にすぎないのであると思い知らされるのである。駅が積み重ねてきた歴史の大きさを感じ、平伏す思いを抱くのである。

また、駅も自分達と同じ生き物であるということも実感させられた。終電を見送った後にホームに残っていたことがあった。新宿駅の1日は慌しく終わる。それはまるでついさっきまで外で元気に遊んでいた子供が、遊び疲れてすぐに寝てしまうことのようにである。1日に数本しかないローカル線の駅ならば、いつ寝りについたのかわからないくらい静かに寝入っていくのであろうが、新宿駅は寝りに入るまで、太陽の輝く昼が続くのである。終電が発車するまでのざわめきと、その行ってしまったあとの静けさの違いの大きさに、ただ驚くばかりであった。

新宿はこの30年間に、副都心として大きく発展してきたが、新宿駅はその変化の様子を見てきたのである。西新宿への都庁移転等、新宿はこれからも次々と姿を変えていくのであろうが、それもまた新宿駅は見続けていくのである。そう思う時、単なる旅人にすぎない自分ではあるが、先を急がず、時には立ち止まってじっくり何かを見つめることの大切さを感じるのである。慌しく人々の行きかう新宿駅に立ってみて、こんな不思議な気分になってみたりすることがあった。

(36回生)